■　みずつち座談会　第１回　　「表現と“痛み”のむこうに」

出演：髙橋伸行（美術家、本芸術祭参加作家）
　　和合亮一（詩人）
進行：丹治嘉彦（本芸術祭アートディレクター）
日時：平成 27 年 7 月 26 日（日）午後２時から
会場：ベースキャンプ　３階特別活動室

Photo:Osamu NAKAMURA

（丹　治）

今回、水と土の芸術祭 2015 において、髙橋伸行さんには新潟水俣病というテーマで表現をしていただきました。これまでの活動をご紹介いただけますか。

（髙　橋）

よろしくお願いします。いろいろな活動をしてきましたが、今回の芸術祭では、少し笑ってしまうのですが、お地蔵さんを連れて旅しちゃったという作品を展開しております。これからベースになってくる活動を一部ではありますが、皆さんに見ていただこうと思います。

この写真は冥王星です。見覚えのある方もいるもしれません。7 月 14 日にニューホライズンズという衛星が、秒速 14 キロで冥王星のわきを通り、鮮明な星の姿を私たちは見ることができました。私たちの「まなざし」が、秒速 14 キロで宇宙空間を飛ぶ時代ということです。そこには痛みを伴わず、身体を乗せているわけでもなく、「まなざし」だけが猛スピードですっ飛んでいる。そんな時代に私たちは生きているんですね。秒速 14 キロ。じゃあ僕のお地蔵さんの旅は、１日 14 キロ歩けたのだろうかと。そんなスピード感のことをやっています。

冥王星の次は月の写真です。最近は高機能のカメラがたくさんあるので、これくらいクロ

ーズアップされた月の写真はいとも簡単に撮れるかと思います。この写真の撮影者は、鳥栖喬（とすたかし）という方です。私の自己紹介にも繋がると思いますので、鳥栖喬のことをお話ししたいと思います。

トークのようす

鳥栖喬は、大砲のような望遠レンズを使って、月の表面にたどり着こうとしているかのような写真を撮っています。写真が暗くて見にくいかもしれませんが、月の表面が写っていますね。実はこの写真が撮られたのは、ハンセン病の療養所です。次にこの写真上でひょうたん型の小さな島が、瀬戸内海に浮かぶ小さな島、大島、白く抜けているように見える部分に、人が暮らしています。国の誤った政策によって、言われなき偏見や差別があり、この島に強制隔離されて暮らしてきた方々がいます。私は 2007 年から大島に行くようになりました。この写真はその大島で見つけた古い写真の一部です。昭和初期頃の写真と思われます。その当時のハンセン病の患者さんたちが、どのような状況にいたのかが何となくうかがい知れる写真だと思います。

ハンセン病をご存じの方もいるかと思いますが、感染症の一つです。らい菌は結核菌と近縁の菌で、感染すると潜伏期間が長く、数年で症状が出ることがあります。らい菌は手や足といった冷たい部分をおかし、末梢神経が麻痺し―これは水俣病ともつながるところがあるかもしれませんが―後遺症で手足が不自由になったり、視力を失う方もいました。こういったハンセン病にかかった方が、平成８年にらい予防法が廃止されるまで、強制的に、法律的にも隔離されてきた事実があります。

さきほどの月の写真を撮った鳥栖喬は、まさに患者としてこのハンセン病の療養所で暮らしていたのです。そして彼には、三つ名前があります。二つはこの写真に写っている表札の「鳥栖喬」と並ぶ「赤松宣昭」。もう一つの名前は本名です。故郷から出てくる時に、自分の

名前を一度捨ててくる方が多いのです。つまり自分の出自が辿られないように名前を隠してしまう。あるいは変えてしまうということがありました。赤松宣昭が、この方の療養所の中の通名で、鳥栖喬が表現者としての名前です。これは、数少ない鳥栖喬の姿を写したと思われる写真です。

実は、僕はこの方（鳥栖喬＝赤松宣昭）に会ったことがありません。2010 年に亡くなられて、その後に、膨大なフィルムが遺されていることが分かり、その一生撮りためたフィルムを僕が預かることになったんです。フィルムやプリントは軽トラック 1 杯分もありました。当初はすごく困りました。預かってもどうなんだろうと戸惑いつつ受け取ったというのが正直なところです。

これが国立ハンセン病療養所大島青松園の約 40 年前の姿です。これも鳥栖喬が撮影したものです。彼はずっと島の中で写真を撮り続けました。島の外に出られないということもありますが、大きなレンズで、ひたすら遠くを見つめるわけです。その一部をご覧ください。船と岩が重なるところを撮ったり―浮き船現象と言いますが―水平線の上をかすめる船があったり、カメラを構える手が不自由なために構図が若干斜めになっているものもあります。膨大なフィルムに目を通していくと、このような写真がいっぱい出てきます。鳥栖喬は、一体、何を見ていたのだろうかと常々思うようになりました。鳥栖は昭和 40 年代から写真を撮っているのですが、フィルムに目を通していく間に、当時の療養所の生活が、自分の中に染みこんでいくというか、自分の記憶に織り込まれていく。療養所で入所者の方々と雑談していて「お前、何でそんなこと知っているんだ」と言われるようになったりします。そんなことがあって、鳥栖喬のフィルムは、僕にとって欠かせない何かになっていきました。

ひたすら遠くを見つめながら、さらにその向こうを見る。あるいはそれを鏡にして、自分を見ていくというようにもとれます。例えば、この写真は夜に長時間露光したものですが、まるで自分が地軸に立っているような、天動説に近い世界観を感じます。

僕は鳥栖喬のフィルムを今後どうすべきかずっと悩んでいました。漠然とキュレーターやコーディネーターのように彼の作品を扱うことはできないと思いました。そして一つの決心をします。それは「鳥栖喬」を襲名するということです。赤松宣昭さん（＝鳥栖喬）のご親友の方に相談して、鳥栖喬を継ぎたいというお話をしたところ、快く受け入れてくれました。そう、僕にももう一つ名前ができたのです。髙橋伸行という本名と鳥栖喬という表現者としての名前です。

髙橋伸行氏　　Photo:Osamu NAKAMURA

次に、病院で活動している「やさしい美術プロジェクト」について、ざっとお話しします。これは大学の学生たちと一緒に行っている活動です。このボクサーの絵は初めて僕が病室で展示した作品です。ちっとも「やさしい絵」ではない。生々しく汗の臭いがしそうな絵です。この絵は僕の兄の病室に飾りました。兄が 30 歳過ぎに悪性リンパ腫で亡くなったのですが、病院で療養中に、二人とも大好きだった「あしたのジョー」というマンガ―そのオマージュというわけではないのですが―飯田覚士さんという本物のボクサーのところへ行ってスケッチをして、病室に飾ったのが、私の一番最初の病院での作品です。

作品とは、発表する場があり、不特定多数の人に向けて一石を投じる強い表現が求められるのももちろん分かるのですが、目の前にいる人たちに対して、本当に自分は何ができるのか向き合うこと。病院という場所は、表現の場として、あるいは表現の場を考える上で、とても重要な場所になるのではないかと思っています。

そこで、学生と一緒に病院に繰り返し出かけるようになります。病院に入院している利用者のところ、病室を回りお話を聞きます。利用者さんたちがどのような気持ちでそこにいるのかを感じ取ります。学生たちは自分なりに、「何かをしてあげる」というのではなくて、自分の姿を重ねて、そこにいる人たちとしっかりと交流するということをやっていく。そこから生まれた表現について、ある学生の取り組みを見てみたいと思います。

これは小牧市民病院です。節分で学生が鬼の格好をしています。ここ緩和ケア病棟は余命をある程度知っている方がほとんどで、自分の意思で治療をやめ、痛みや苦痛を取り除きながら安らかな最後の時間を過ごしています。95%の方が、この病棟で亡くなる現実があります。これは病院での行事に参加している利用者さんです。職員の方に「鬼の格好をして」と頼まれ、学生が鬼に扮して豆まきに参加しています。このような緩和ケア病棟の様子を見て、驚かれる方もいるのですが、家族や友人が揃って、節分の行事をやったり、とても明るい雰囲気で記念撮影をしているのが印象に残ります。このようにアートの活動が混ざって活動しているケースは珍しいと思います。小牧市民病院では 10 年以上の取り組みを通して信頼関係

がありこのように受け入れてもらっています。

この鬼の格好をした学生の鈴木君は、緩和ケア病棟に提案をして、木を彫り流動的で不思議な形の手のひらサイズの作品を作りました。病気の進行具合で、感覚が無くなったり、意識が遠のくような中で、私たちにできることは限られてきます。皆さんもご経験があるかと思いますが、最後は手を握るしかないという状況にもなります。そういう中で、何か人と人との関係性を取り持つようなものを作りたいというのが彼の提案でした。紆余曲折を経て、最終的には、木を彫った造形に行き着きました。この写真のように最後の時間を過ごす中で、握り合ったり、撫でたりするということで、作品は「にぎにぎ」というユニークな名前がつきました。病室の壁には、この利用者さんが描いた富士山の絵があります。この絵を描いた頃は、まだベッドから起き上がることができて、お孫さんの前で誇らしげに絵を描かれていました。おそらくこの富士山がこの方が描く「最後の絵」になったと思います。こうした場面に立ち会えるのも、私たちにとっては一つの喜びですし、利用者とその家族にとっても忘れられない一日になります。時々いただく「にぎにぎ」の写真には利用者さんがやせ細った手で力強く握りしめているものや、そっと握って静かにお過ごしの方の様子もうかがえます。一体何が作品になっているのかというと、鈴木君はきっと「人と人の間」を作りたかったのではないか。ものを作って終わりではなく、関係性を紡いでいくということもテーマにして取り組んでいます。

（丹　治）

髙橋さんは、大島でのハンセン病療養所で丁寧に関係性をつなぎ合わせて、さまざまな表現形態を展開しています。後でその辺もお話しいただきたいと思います。では、和合さんよろしくお願いします。

（和　合）

皆さんこんにちは。髙橋さんに引き続いて、私の活動についてお話しさせていただきます。すべてを語るのはなかなか難しいのですが、とりあえず時間の範囲内でお話をさせていただきます。

３月 11 日２時 46 分に、皆さんも同じ思いをされたかと思うのですが、今まで体験したことのない揺れを経験いたしました。それから、音を立てるようにさまざまなものが大きく変化をしていって、３月 11 日の夜、私は家族と毛布一枚で、何とかコンビニで手にした食パンやソーセージをかじりながら、駐車場で揺れに耐えながらラジオを聞いておりました。午後 10 時くらいにラジオ福島のアナウンサーの方が「今、入った情報をお知らせいたします。仙台市の若林区で、遺体が打ち上げられました。1,000 人の遺体が打ち上げられました。」といわれたのです。そのアナウンサーはベテランの方なのですが、マイクの前で大泣きされまし

た。わっと泣いて、その後に「皆さん、頑張っていきましょうね」と。私はこのアナウンサーの方はよく知っていて、あまり理性を失う方ではないのに、わっと泣かれた様子から、今、体験している震災は、いわば自分で感じた中での一番、感じたことのない未曾有の災いなのだということを、はっきりと体で感じた瞬間でした。

３月 12 日、13 日といろいろな情報が入ってきました。まず、３月 11 日。地震が続いている中で、私は南相馬に６年間勤めていて、最初の教え子が南相馬の原子力発電所で働いていました。その生徒からしきりに電話がきます。「先生、原発が爆発すると現場で言っているから、遠くに逃げたほうがいい」。３月 11 日に何件も電話がありました。私も、目の前のことで精いっぱいで、何とも返事ができないでいると、「先生、そうやって、返事するとかしないとかの問題じゃないのだ。もう爆発するって現場で言っている。現場ではもう大騒ぎで、現場の上司が、みんなでとにかくできる限り、遠くに避難しろと言ったんだ。先生も福島にいては大変なことになる」と何件も連絡がきたのです。３月 11 日に、もう原子力発電所内では爆発するということが、作業員の中に情報として回っていました。そして、その作業員の方々が親戚や友達に電話をして避難をしていくので、ニュースでは全然聞こえてこない爆発するという情報が、いろいろなところに出回る形になります。どうしてこんなに道路が混雑するのかと首を傾げるところもあったのですが、原発が爆発するときちんと情報として分かっていた相双地区の方々が避難を始めた。それで行列になったという経緯がありました。

３月 12 日、そして 13 日と原子力発電所が１号機、３号機と爆発していきます。３月 14 日、雨が降りました。その雨が放射能を含んだ雨で、残念ながらその雲が福島をずっと通過していったので、放射線量が高い土地になってしまいました。３月 15 日、16 日と経過していく中で、たくさんの方が福島から避難しています。私はラジオで、こういうアナウンスを耳にしました。「福島から避難していく皆さん、どうぞ落ち着いて避難してください。今、たくさんの方々が福島から避難しています。道路の途中や路肩などで事故が起きたり、あるいは車が動かなくなったりしています。どうか落ち着いて避難してください」という呼びかけがずっと続きました。私はそれを聞いて、福島は終わりだと確信をいたしました。３月 16 日、まさに私の家族も避難をしていきました。ただ、私は、父と母がおりまして、避難を申し出たのですが、父は足が不自由なので、避難所へ行っても、入れてもらえないかもしれないと心配をしていました。現実、障がいを持っている方、あるいは体が不自由な方は、避難所では受け入れてもらえないのです。幾つもの場所をたらい回しにされて、結局、住んでいる場所に戻るというケースがたくさんあったのです。避難命令が下ったらどうすると父にたずねたところ、「隠れて住む」という一言だったのです。父と母を残しておけないと思い、私は残りました。

そのようなことで、妻と息子は山形に避難したのですが、私は実家から３分くらいのアパートに一人おりました。３月 16 日に妻と息子が避難して、一人になったのですが、テーブルの上に手紙が置いてありました。息子からの手紙です。私は学校に勤めているのですが、学校から戻ってきて、テーブルの手紙を見たら「お父さん、きっとまた会えるよ」と書いてあるのです。何かもうこれで会えないのかという思いを抱いたりしたのです。

大変な孤独に見舞われたときに、３月 16 日の夕方から Twitter で今の心境をツイートするようになりました。Twitter というのは、140 字の制限字数があり、それをインターネットに載せるという仕組みになっています。私は、それまでほとんど Twitter をやったことがなく、やり方もおぼつかない感じで、あまり馴染まなかったのです。５分から 15 分に一回、大きな地震がやってきます。本震と同じくらいの地震の中で、今、ひょっとするともっと大きな爆発が起きるだろうと。そんな気持ちを抱いていました。大きな爆発が起きる前に、今の福島で暮らしていたことを残しておきたいという思いで、Twitter を始めたのです。最初のツイートした言葉が、「放射能が降っています。静かな夜です。」という言葉でした。そのようなことを続けていくうちに、夜に Twitter で今の震災の状況を書いてツイートするということを繰り返すようになりました。それを３か月、毎晩、繰り返し行ったということが、震災後の自分の最初の活動です。今、見ていただいているのは、４月１日にガソリンが満タンになりまして、福島の太平洋、相馬の松川浦という港に行って、その様子を写真に写して、それを毎晩、Twitter に上げたものです。多分、放射線量の問題から立入禁止になっていて、マスコミの方も入れない状況だったと思います。

相馬松川浦　　撮影：和合亮一

松川浦は、私が幼い頃、魚釣りによく父と一緒に出かけたところですが、松川浦の風景は、

ほとんど元どおりの形ではなくて、それを写真に写すのは、大変戸惑いがありました。それで松川浦に行ったのですが、一度戻ったのです。この状況があまりにも辛くて、自分が愛した美しい松川浦が、このような状況になっていて、しかもこの写真の背景で、たくさんの方々が亡くなっています。そこにカメラを向けて、写真を撮ることに大変な戸惑いが、自分の中でありました。ただ、それで戻った時に、セブンイレブンで少し休憩していたら、その当時、勤めていた同僚の先生とたまたま出会いまして「どうして和合さん、ここにいるんだ」という話になって、「実は、ここの姿を見に来たのです。自分でそれを撮影したいと思ってきたのですが、撮影してそれを Twitter で知らせるようなことは、自分にはとてもできません。」と話をしたところ、その方が「いや、それでも伝えてほしい。今、自分たちが経験した震災のことを伝えてほしい。この光景を和合さんがそう思っているんだったら、必ずいろいろな方に伝わると思うから、せめてこのことを写真に撮って伝えてほしい。」と強く言われまして、その言葉に励まされて、もう一度、戻って写真を撮った次第です。そのようなことを続けていくうちに、相馬に何度も通うようになって、風が吹いてくると、亡くなった人が話しかけてくるような気持ちを抱きました。私は、日本というものに、「鎮魂の文化」、「レクイエムの文化」が乏しいのではないかと考えるようになりました。それは、今もなお、そう思っています。

たくさんの方が、故郷を失って、命を失った。そのことをきちんと受け止める文化の土壌が日本には無いのだと強く感じました。私は、毎日、亡くなった方に言葉を捧げるという気持ちで詩を書き始めました。そして写真を載せて、毎日、Twitter に上げるようになりました。『詩ノ黙礼』という詩集を今日お持ちしたのですが、この黙礼というのは、レクイエムの意味を込めています。鎮魂の意味で、ずっと書き続けていて、気がついたことがあります。鎮魂というものは、静かな中に存在するのかとずっと思っていたのですが、毎日、書き続けていくうちに、生きている自分たちの暮らしが、燃え上がるようにそこに存在しなければ、亡くなった方々の命を沈めること、魂を沈めることはできないのだ、自分たちが精いっぱい燃え上がるように生きていかなければ、亡くなった方に思いを届けることはできないのだ、だから祭というものがあるのだと気づくようになりました。だから、さまざまな祭がありますけれども、祭というものは、そもそも静かなものだけではなくて、命と命を燃え上がらせるようにぶつかっていきます。生きている私たちも、生き残った私たちも、ぶつかるように、燃え上がるように生きていかなくてはいけないのではないかと思うようになりました。

毎日、写真を撮っているうちに、セブンイレブンでお会いした同僚の先生に励まされたことが、ずっと心の中にあって、相双地区で暮らしている方々に話を聞くようになりました。４月の中頃くらいから、相馬で暮らしている方々に話を聞くというインタビュー活動を始め

ました。どこに頼まれたとか、だれに頼まれたということも全然なく、自分で、これはインタビューをして言葉を残しておかなくてはいけないという思いの一念でお電話をし、話を聞いて、録音をして、写真を撮ってということを繰り返しました。インタビューを受けた方は、「和合さん、これはどこかに掲載になるのですか。」と聞かれたのですが、これは私が個人的にやっているので、掲載ということはないのですけれども、記録としてずっと取っておきたいのですとお話をしました。快くお話をしてくださいました。まっすぐ見つめていると、特に弱っている方というのは、お話ができないのです。だから、話してくださいといって、じっと見つめると、お話はできないのです。ただ、耳を傾けて、そして話を聞こうとすると、目の前に耳があると、人は話を始めるということに気づきました。

私はその後もずっとインタビュー活動をしているのですが、今現在、浜通で暮らしている人、あるいは福島で暮らしている人、そういう方々の言葉を聞いて、その言葉に「芯」があるのだなと思うときがあります。自分が分からなくて迷っていて、何も解決がつかない時に、ほかの方にインタビューをしていて、そのことを僕は聞きたかったんだ、そのことを自分は言いたかったんだというように思うことがあります。つまり言葉というのは橋を持っていて、橋を架け合って人と人というのは繋がりあっているのだと感じます。だから、自分の考えというのは限界がありますが、ほかの方々の話に耳を傾けていると、必ずそこに自分が探し求めていたい言葉の芯のようなものがあると、今も感じています。その芯のようなものを探しながら、今現在もインタビュー活動を続けて、その言葉をまた作品に書いていくということを繰り返しています。これは、インタビュー集なのですけれども、このインタビュー集のようなものをいっぱい、これからもまとめていきたいと思っていて、話を少し前に戻しますが、レクイエムの文化というものをもっと私たちの手で立ち上げていきたいと思っています。

福島で「未来の祀り」というものを行いたいと思っていて、今現在、準備中です。その中で、創作神楽を作っています。どうして神楽なのかといいますと、神楽には、亡くなった方に思いを届けるということ、生きている私たちの命にエネルギーを与えること、その二つが意味としてあるそうなのです。ですので、神楽というものを私たちの手で新しく作る。それを「ふくしま未来神楽」という名前で、今現在、進行しています。実際にあと１か月となりました。私は、発起人ということで動いているのですが、柱を立てて動かすということは、とても大変です。何が大変かと言いますと、特にお金がかかって大変で、今、一生懸命に協賛金などもお願いしたりしながら、初めてそういうところに向き合いながら、改めて社会と向き合うということはどういうことなのか、祭を立ち上げるということはどういうことなのかを、ものを作るということから、福島の方々と分かち合っていきたいと思っています。

（丹　治）

髙橋さん、和合さん、貴重なお話をありがとうございました。実は、私も福島の出身です。和合さんとは実家も距離的には７、８キロのところに、まだ両親が住んでいます。3.11 のときは、新潟市内も相当揺れました。あの揺れは、2004 年の中越地震、2007 年の中越沖地震とはまた違うと思いました。テレビを見ると、悲惨な状況が拡がっていました。あの時、新潟は日本海側の拠点ということで、ガソリンや物資が困窮することはありませんでした。新潟市内に住んでいると全くそういう状況が鑑みられることはありません。また情報というものが東京を経由して入ってきます。隣の県であるにもかかわらず、情報が東京を経由してくるという現実は一体何なのかと、当時、改めて気づかされました。

先ほど、和合さんからお祭りという話がありました。「水と土の芸術祭 2015」は、祭りというフレームで、そこに集い楽しい時間を紡ぎ出すという性質の一方、自分たちの立ち位置は何なのか、新潟市に住んで、これから我々はどこに向かおうとしているのかを表現を通して考える時間軸になってくれればという思いが私自身にはあります。この辺を含めて、皆さんと一緒に今日のテーマである「表現と“痛み”のむこう」側にあるものについてお話しできればと思います。

（休　憩）

（丹　治）

第２部では二人が表現を通して何を訴えようとしているのか。表現とは何なのかということに迫っていければと思います。2010 年の「瀬戸内国際芸術祭」で私は小豆島で作品を展示しました。髙橋さんは隣の大島で展示をされ、そこで私自身初めて出会ったのです。これはその出会った場所の写真です。この写真が何なのかということから、髙橋さんにお話いただきたいと思います。

（髙　橋）

僕の表現は、どちらかというと、自分をどんどん無くしていくような作業だと思うことがあります。自分はこうなんだということを極力消していくような作業に近いのではないかと思ったりするのです。この取り組みを見ていただくと少し分かってもらえるかもしれません。写真の真ん中のコンクリートの塊は、先ほどのハンセン病の療養所で、実際に使われていた解剖台です。真ん中から真っ二つに割れているのですが、30 年ほど前に使われなくなった解剖台が海岸にうち捨てられていたのです。ひょうたん型に見えていますが、これは引き潮の

状態です。潮が満ちると海の下に沈みます。芸術祭が始まる直前に、ある入所者の方から連絡があり、「解剖台だと思うんだがどうする？」というのです。私はすぐ、大島に飛んでいき、現場に向かいました。当時はこのような状態で横になって転がっていました。入所者の皆さん―元患者さんたち―は、これが解剖台だとすぐに分かります。自分たちの仲間の亡骸をこの上で洗った経験をされている方がたくさんいるからです。解剖というのは、この島の中で日常的に行われていて、なおかつ場合によっては入所する際に「解剖願」というものを、半ば無理矢理書かされているのです。「自分にもしものことがあれば解剖してください」と願い出るような書類を書かされているということです。それだけを聞いても、当時の患者にいかほどの選択肢も無かったというのがすごくよく分かります。

当時、私はこの島の中で、「古いものと捨てられないもの」を集めますと宣言して、皆さんの間を歩いて回っていました。なぜそんなことを始めたかというと、小さな島の中では―例えば人が亡くなられても―故郷に帰ることはない。そうすると、身の回り品というのはすべて捨てられていくわけです。ほとんど部屋ごとリセットされます。僕自身、それがすごくショックでした。人が亡くなっていくというのは、確かにそうなのかもしれないけれど、何かその残響というか、人生が、その後に余韻を残していくようなことが、この島では無いのです。そこに「痛み」を強く感じました。

そういう現実の中で、入所者の皆さんの間で一体何が残っているのだろうと思ったときに、実は入所する際に持ってきた柳行李とか、意外と捨てずに持っているのです。入所者の皆さんともお酒を飲んだり、カラオケしたりするようになってくると、そういった話が聞けるようになってきました。そのときに思ったのです。捨てきれないものの中に、入所者の皆さんの表現があるのではないか、この大島という島が、何か伝えきれない表現というものを持っているのではないか、それをすごく強く感じました。この時に、僕は自分がアーティストとして、「自分の作品を作る」という考え方ではなくて、「この島の表現を外に伝える役割をしたい」というように切り替わったのです。そこには自分というものがなくて、島が表現している声を外に伝えていくような仕事をしたいと思いました。そのような経緯で取り組みを始めたところに解剖台も捨てられないもの、あるいは捨てきれないものの一つとして浮かび上がってきたのです。これが、解剖台が海岸から引き上げられたところです。

しかも時期は芸術祭が始まる１週間くらい前、もう直前ですね、この解剖台があることが分かりました。僕はさっそく入所者の自治会に、ぜひ解剖台を展示をしたいと申し出ました。当然、賛成と反対があるということも分かってはいたのですが、自治会の山本隆久会長はすぐに決断されて、解剖台だと分かったからには、そのまま放っておけないということで、なんと次週には海から出されました。この写真にあるように、引き上げる際に真っ二つに割れ

てしまったのですが、二つに割れることで、重さが軽くなり出てくることができたのです。もし、一つの塊だったら重すぎて、出てこなかったですね。このように供養して、その後は崩れた部分を一つ一つ修復していきました。毎日、ついた貝殻をはぎ取り、歯ブラシで洗って、ばらばらになった破片をくっつけてという作業です。

（丹　治）

全部取ったのですか、貝殻とか。

（髙　橋）

はい。上の蓋の部分は取れました。ただ、下の部分は完全に解剖台と一体になってしまっているので、ここまでが限界です。このように解剖台を展示することになったわけですが、必ず質問や声として上がってくるのが、「入所者の皆さんの気持ちはどうなのか」ということです。それは、確かにそうです。そして僕自身、このように解剖台を掲げることが正しいとか、間違いということではなくて、解剖台は一体何だったのかということを考え続けること自体が、僕に与えられていることでもあります。入所者の皆さんの中には二度と見たくないという方ももちろんおられます。また、ある入所者は「この島で亡くなった人はたくさんいて、ほぼすべての方が解剖されていた。そういう時代を実物を通して感じてもらう、そういう機会になっているのではないか」とおっしゃいました。今では解剖台は大島の象徴の一つとなりつつあります。

（ハンセン病療養所大島でのアートプロジェクト｛つながりの家｝）

（丹　治）

僕も最初に見たときはすごくショッキングで、感傷的な気分になりました。そして新潟に帰る電車の中で、自分にとってあれは何だったのだろうと思いました。人と向き合う行為と

は何なのか、そこには差別や、業（ごう）という問題が横たわっているのは間違いないわけで、それを自分がどう受けとめるのか。そして自分があれを見て前に進みながら、その答えを自分自身で出さなければいけないと変わっていったのです。

当時、日曜美術館で瀬戸内での髙橋さんの作品は長い時間取り上げられていたので、映像等で見た方もいるかもしれません。このほかに、カフェができていましたね。非常にやわらかい活動で、入所者の皆さんはいらっしゃるし、我々もそこでお茶が飲める。とてもおいしい時間が流れていました。

（髙　橋）

「カフェ・シヨル」という名前です。シヨルというのは、讃岐の方言で「何々している」という意味で、例えば「だれだれさんは今、何しているの？」というと、「カフェしよるで！」みたいな（笑）。少しフランス語っぽいかわいい響きです。大島の療養所の中の施設をそのまま利用して使っています。現状復帰が条件ですが、復帰できないままここまできております。ここで使われている器は、島の土を掘り精製して、粘土を作るところから始め、焼きものにしています。この作業だけで１年くらいかけています。島を感じてもらうために、島の土の器で味わってもらう。メニューも、島の入所者の方が作った野菜を取り入れています。材料を買って、メニューを優先して作っていくのではなくて、入所者の皆さんの野菜からメニューを発想して作る。そういう意味では、このカフェを運営していた卒業生の二人は、ここでしか作ることのできない作品を作っていたとも言えます。

このカフェには、カップルがひょいっと来てくれたりします。ハンセン病の療養所は多くの小学生、中学生、あるいは医大の学生などが見学に訪れるのですが、カフェではぶらりと遊びに来たり、カフェで約束した誰々さんに会うとか、そういうノリなのです。それが、実はとても大事なことです。どういうことかと言うと大島に来るきっかけが多様だということです。大島のことを勉強して知ることも大事なのですが、「また次も来るよ！」みたいな折り返しが始まるような場所を作っていく。このカフェでたまたま出会った入所者の皆さんと話すことがあるかもしれないし、別に話さなくてもいい。ただなんとなく時間を共有しているという場所を作りたかったのです。きっかけは人それぞれでいろいろな人が「関わるフック」みたいなものがたくさん島の中にちりばめられていく。その拠点の一つとして、このカフェがあります。

（丹　治）

自分の表現として、主体的な物語というよりも、何か自然発生的に紡ぎ出していくような空間に変えていく。それを後ろから支えていくような印象を持ちました。

会場の皆さんから、髙橋さんに聞いてみたいことなどいかがでしょうか。

（会　場）

解剖台を目の前にした時に、自分だったらすごく痛みと向き合うと思います。髙橋さんは痛みを感じたのか、その痛みとどのように向き合ったのか教えていただきたいと思います。

（髙　橋）

僕の場合は、痛みというより、最初はそれが何なのかが分からないということに近かったと思います。まず解剖されるということ自体、それから自分の意思にかかわらず解剖されていくということ。いろいろな意味で、それがよく分からないという、もやっとした感じがありました。一方で、実物を見ると、その質感そのまま、直に自分に届いてきます。解剖台に染みこんださまざまなものが質感として、目からも、手からも飛び込んでくるのです。正直、ひと月くらい、まっすぐ歩けないくらいふらふらになっていました。それは自分でもよく分からない。でも、それを人々に見せたいというか、自分も見てみたいという欲求も一方であるのです。その狭間で揺れて、ふらふらになっているような。いろいろな方からの批判がいっぱい出てくるし､何とかぎりぎり解剖台を人々に公開する流れを作っているという状態で、向き合えていたのかどうか分からないのです。それが正直なところです。

（丹　治）

ありがとうございました。

和合さんの詩の一節に､「放射能が降っています。静かな夜です」というフレーズがあります。新潟で初雪が降るのは、11 月下旬頃です。北風が強いので、雪がしんしんと降り続くということはありません。福島の場合、盆地ですので、ある朝、寒いな初雪かなと思うと、しんとした中で電車の音が遠くから響いて、雪が積もっている。新潟の初雪のイメージとは大分違います。私は、この詩を読んだ時、その情景が目に浮かんだのです。商売柄どうしても、ビジュアル的に、脳にある風景がよぎってきます。詩にはそういう力があるのだろうと思うのです。ただ、このフレーズの場合は、ものすごく重い。放射能が降っているということと初雪とは全く違う。我々が体験したことのない、すごく重いものが降っていったのだなということが、このフレーズを読んだときに、自分の体の中に伝わりました。

丹治嘉彦氏（進行）　　Photo: Osamu NAKAMURA

和合さんは著書の中で、内なる声、他人の声、超越した声の三つの声が和合さんを突き動かしているとお書きになっていますが、詩を書く際に何かある情報とか、イメージを言葉に変換する作業等があるのか、その辺をお聞かせいただければと思います。

（和　合）

髙橋さんのお話を、同じ経験をさせていただいているなと思ってうかがっておりました。まず、自分がここにいないという感覚です。能楽師の津村禮次郎さんという方と一緒に能楽の舞台を、私が詩の朗読をして、その後、かぐや姫を津村さんが舞うという舞台を何度かしています。「津村さん、一番能楽が舞えているのはどんなときですか」とうかがったら、津村さんはずばりと「自分がここにいないと思ったときです」とおっしゃったのです。今のお話とすごく重なると思うのですが、私も同じことを感じているのです。自分自身では、とらえきれないような何かを自分を超えた直感が、宇宙のリズムを伴って、息をする時に、何か今まで体験したことのないようなイメージだったり、五感の感じだったり、味わいだったり。私は子どもたちに詩を書くことを教えるときに、五感というものを感じながら詩を書こうと言っているのです。今、どんな味がする。先生、詩を書くのに味って関係あるの。いや、関係ないけど、どんな味がする。だからどのように、今、甘い味がするか。その甘い味というのが、実は、言葉を考える時の味なのだよ。そのような話をするのですが、五感なのです。五感で感じる時のイメージで、言葉ではなくて、何か自分の温度が１度、２度上がっているような、変な表現をしますけれども、例えば、紙を見た時に、白い紙が立ち上がってくるような感覚といったらいいのか、そういう動きになった時は、つまらないことはどうでもよくなるんです。私もいっぱい批判を浴びました。１度、２度上がってくると、つまらないことはどうでもよくなるのです。言葉にしたい、形にしたい、相手に届けたい。その感覚ってすごく独特な感覚で、例えるなら、朝起きた時に、何か言葉が浮かんでくる時ってありますよ

ね。あるいは音楽が浮かんでくるとか、昔の思い出が浮かんでくるとか。目覚めた時に浮かんでくるものって、何の縛りも責任もないんです。だけれども、その日一日の自分自身を表すイメージだったり、言葉だったり、先ほど言った言葉の芯だったりするのではないかと、僕は思っているのです。

最近見た夢を一つだけお話しします。震災で亡くなった方が夢に出てきたのです。だけれども、僕は震災で亡くなったことを全然知らなくて、夢の中で話をしているのです。最後に手を握ったのですが、すごく冷たいのです。とにかく冷たくて、僕は小さい時から、人の手を握ると熱いと言われ、体温が非常に高いのですが、一生懸命温めようとするのです。その途中で、この人は亡くなったのだと夢の中で気づいたのです。そんなことがずっと今、自分の中であって、何か言葉にする時に、どうして手の冷たい方が登場されるか、手の冷たいイメージが自分の中で出てくるのか、どうして目覚める時にこれが浮かんだのだろうという理由を考えずに、そのままそれを自分の直感としてとらえて形にしていくということをずっと続けていました。それが朝の目覚めではなく、普通の時でも目が覚めていくような感覚を味わう時に、何かそういった言葉をつぶやきたいと思っています。

（丹　治）

和合さんの言葉の中に、新しいことをすれば、必ずだれかが反応してくれるというフレーズがあります。これは、今、お二人が話してくれた批判もあるのです。すべて人が歩く際に、だれも拍手喝采をしながら前に進むことは不可能です。いろいろな人がそれぞれの立場でものを言う。でも、その先を一歩踏み出すことが何より重要であり、その歩幅こそが僕は表現であると思います。今のお二人のお話しから聞いてみたいことなど何かありましたら、ご意見をいただければありがたいのですが。

（会　場）

「表現と“痛み”のむこうに」は何があるのでしょうか。

（丹　治）

和合さんであれば詩、髙橋さんであればさまざまなプロジェクトでしょうか。そのむこうというのは、僕の解釈ですと、我々に突きつけられた問題なのかなと思います。髙橋さん、「痛みのむこうに」はすごく難しいタイトルかと思いますが。

（髙　橋）

僕が活動している場所は病院や療養所、老人福祉施設などです。そこで活動している学生、私自身もそうなのですが、最初は病院という場所を一つの枠にはめて考えてしまうのです。「病院」という言葉の中に入れてしまうのです。そうすると、それ以上、考えなくなって、病院だったら、こういうかわいらしい絵がいいだろうとか、病院の壁だったらクジラがいい

んじゃんみたいなものになってしまう。ところが、実際、その場所に行って、解剖台の質感がわっと身にしみ込んでくるみたいな、情報という言葉では言い表せない、何かが流れ込んでくる。そういうものを感じると、その人の中でぐっと発火するようなものがあるような気がします。それは、多分、一言で言うと「痛み」。その人の痛みを自分の中で重ねて、一人の痛みを自分の痛みのように感じるという言い方があると思いますけれども―そういう痛みみたいなものを通して、自然と突き動かされる、自分の中で発火するものがある。学生の取り組んでいる姿、先程紹介した木彫りの作品を見ていても、彼の中で何かが発火しているのです。火がついて、それがどんどん燃えさかっていって、連鎖的に次にどうしたらいいの、次、これをやったらいいの、こうしていったらいいぞ、というエネルギーにどんどん変わっていくのです。そういう意味で、痛みということ自体が、一つのキーワードのように感じます。僕自身も―痛みの共感というのでしょうか―人の中で起きていることが、自分の中でも起きるということが一つの出発点になっている、そう思います。

（丹　治）

和合さんいかがですか。

（和　合）

ありきたりな言い方になってしまいますが、表現と“痛み”のむこうに現実があるという感じです。僕は大学の時から詩を書き始めて、友達に詩を渡したら嫌な顔されて、頭にきたので、紙に自分の詩を書いたものを大量に印刷して、僕は福島大学なのですけれども、1,000枚近く福島大学の改札口で配ったのです。配りきって、すごく満足して大学に向かったら、私の作品が所々に捨てられていて、足跡がついていたり、破かれていたり、ぐちゃぐちゃに捨てられていたのです。それを見たときに、非常に痛みを感じて、だけれども、これが現実なのだと思ったのです。つまりこれが自分の実力なのだと。だから、よしこうなったら、絶対に捨てられないやつ書いてやると思ったことがきっかけで、現在も同じようなことを続けているという感じなのです。自分の実力や自分の力を知るということが、次の行動に向かう原動力になるわけです。

だから、今でも震災も、いろいろな痛みを分かち合っていますけれども、その中で自分の力の無さをものすごく思い知らされます。だけれども、知らされた時に、いつでも思い出すのは、駅から降りた時の私の作品の屍たちの様子なのです。自分はこれから先、絶対に詩人として、こういうものを書いてやると思った、その気持ちを奮え上がらせることを繰り返すのです。

和合亮一氏　Photo:Osamu NAKAMURA

今現在、福島は何も状況が変わっていないのに、復興ムードを強いられている感じがあります。現実が伝えにくい状況になっています。福島の方々自身、どこにもぶつけようがない、そういう怒りや悲しみを抱えていて、それでも元気に暮らしている状況があります。

私の祖父は、シベリアで抑留されて戦死しました。その祖父は、実は新潟と縁があって、新潟出身だというように聞いてきました。だけれどもシベリアで抑留された祖父は、私が大きくなるまであまり語られることがありませんでした。日本人というのは、どうしてもタブーを抱えてしまって、そのタブーを濁して、何かを言葉にしようとすることをしないのです。そういう恐ろしい一面を持っていて、簡単にトカゲのしっぽにして、現実を切り捨ててしまう、そういう一面があります。トカゲのしっぽが切られるたびに、私たちは実は痛みを感じているのですけれども、その痛みということすら隠して、平然と生きているような現実が、今、目の前にあります。そういう表現と痛みの向こうにある現実を見つめながら、その上で現実を超えようとする芸術の力、ものを作る力が求められているのではないか。マスコミを敵に回しているわけではありませんが、すごくそういう意味では頼りになりません。だから、それこそ今度は芸術の表現というのが、暗い部分、闇の部分、トカゲのしっぽの部分を譲り受けて、どのような形にでも変化していって、進化していって、それを一つの形として、ものとして、大間違いも、何かに突きつけるということが、この痛みのむこうに必要なのではないかと思っています。

（会　場）

和合さんの話の中に鎮魂ということがありましたが、そういう気持ちにすぐなれるのか。それとも、公表するなどしなければ、本当の鎮魂にはならないのかということと、私は今日、和合さんが詩の朗読をやってくれるのかと楽しみにしてきたのですが…。

（和　合）

まず鎮魂のことですが、それこそ実は、話したかったことなのです。時間の都合上、話さなかったのですが、少しお話しすると、今、見ていただいた写真を撮りながら、とても自分の力では表現しきれない、とても語り尽くせないと感じました。ところが、同僚の先生に励まされて、もう一度、戻って、シャッターを切るところから、現実と何か一つ一つ区切りをつけられるような印象をシャッターの音と一緒に感じるようになりました。それを今度は言葉にするということを、とにかく毎日続けることで、いわば修業の業のような感覚で、少しずつ自分の中で、自分なりにですが、少しずつ語る力というか、資格というか、そういうものを自分が得たい、説得力をつけたいと思って、とにかく毎日、書き続けました。僕は幼い頃、家族が亡くなった時に、毎晩、仏壇にお経をあげる変な子どもだったのです。毎晩、お経をあげていると、亡くなった家族と気持ちが通じ合うような気がして、ちょうど今、ベースキャンプで仏壇を飾っていますけれども、あの仏壇はうちのと同じ仏壇です。お経を読み終わると、仏壇が明るく見えるのです。それを毎日やる子どもでした。自分にとって、毎日、何かを続けるということが、思いを届ける資格というか、切符を得ることができるというように、思っているところがあって、それで般若心経を唱えていました。それが今の朗読をするということに、実はつながっていて、この話を始めると、すごく長いので、機会がありましたら、またお話しさせていただきたいと思っております。

（丹　治）

ありがとうございました。詩の朗読をしていただければうれしいのですが。

（和　合）

最後に朗読させていただきます。

南三陸の防災庁舎の話はご存じでしょうか。南三陸で、遠藤未希さんという方が、最後まで避難を呼びかけて、最後には、残念ながら波に巻き込まれてしまいました。私は、12 月４日に佐渡裕さんの企画で、南三陸防災庁舎の前でレクイエムのコンサートを捧げるということをさせていただきました。ところが、朝の９時から本番の３時まで６時間、十数回のリハーサルをしたのですが、雨と風が強くて、一回も成功しなかったのです。３時から生放送の本番で、一回も成功しないまま行いました。生放送でやっと初めて最後まで読み切ることができました。読み終わって、初めて最後まで読んだという印象を今も思い出します。これは、遠藤未希さんのご両親がＮＨＫの記録映像で防災庁舎の映像を見て、未希さんが最後まで「高台へ避難してください」という声を聞いて、お父さんとお母さん、特にお母さんが「まだ言っている」と言って涙をこぼしていた、それを拝見して、すぐ書いた詩です。

【詩の朗読】

詩集『詩ノ黙礼』（和合亮一著 新潮社 2011）より

朗読する和合亮一氏

この詩を朗読して、終わった後、初めて読み終えることができて、涙が止まらなくて、風と雨が降る中で、わっと大泣きしたのを覚えています。風と雨がすごく強かったので、ひれ伏すようにして泣いて、皆さんも同じだと思うのですけれども、何回かこれまでの生きていく中で、涙を流したことがあると思うのです。大声で泣いたこと、そっと泣いたことがあると思うのです。だけれども、僕は震災後、感じています。涙を流す時こそが、本当の私たちの物差しなんだ。涙が流れることが本当なんだ。何を信じたらいいか分からないこの世の中で、涙がこみ上げて止まらないとき、それこそが私たちの生きている本当だと思っています。

最後、朗読までさせていただきまして、ありがとうございました。やはり私にとってのルーツは新潟だと思っています。福島潟という地名もありますし、また声をかけていただけたらと思います。今日は、髙橋さんも本当に、すばらしいお話をありがとうございました。

（丹　治）

和合さん、それから髙橋さん、今日は本当にどうもありがとうございました。とても熱いいい時間になったと思います。皆さんともう少しやり取りできればと思いましたが、お二人の熱いトークに巻き込まれて、あまり時間を取ることができませんでした。その辺、お詫びしたいと思います。

今日は、短い時間でしたが、髙橋さん、和合さんに「表現と“痛み”のむこうに」という表題で、さまざまなことを語っていただきました。もう一度、お二人に拍手をお願いしたいと思います。

Photo:Osamu NAKAMURA

■高橋伸行（たかはしのぶゆき）　美術家、本芸術祭参加作家

やさしい美術プロジェクトディレクターとして、2002 年より愛知県厚生連足助病院、発達センターちよだ、老人福祉施設ぬくもりの里などでワークショップや作品制作を担当。近年は小牧市民病院緩和ケア病棟でのアートプロジェクトを展開している。2006 年、2009 年「大地の芸術祭」に参加。新潟県立十日町病院との協働によるアートプロジェクトを展開。2010 年、2013 年「瀬戸内国際芸術祭」に参加。国立（ハンセン病）療養所大島青松園にてアートプロジェクトを展開。入所者で写真家の鳥栖喬（故人）の生涯撮りためたフィルムを預かることになり、2013 年に鳥栖喬を襲名。2013 年グッドデザイン賞受賞。「水と土の芸術祭 2015」ではアートプロジェクト「旅地蔵－阿賀をゆく」を展開。新潟水俣病の兄弟地蔵で、安置場所の定まらない足尾の石の地蔵を「旅地蔵」と名づけ、地蔵とともに阿賀野川を遡る旅をした。河口の松浜から出発し、上流部の鹿瀬、草倉銅山本山跡地までを踏破し、松浜の nico に「旅地蔵」を、「松浜の家」には旅地蔵が身にまとった人の営みと記憶をインスタレーション展開した。

・高橋伸行　(@yasashiibijutsu) | Twitter　　・旅地蔵 facebook ページ　https://www.facebook.com/tabijizou2015/

■和合亮一（わごうりょういち）　詩人

1968 年福島市生まれ。1998 年『AFTER』で第 4 回中原中也賞、2006 年「地球頭脳詩篇」で第 47 回晩翠賞、2012 年みんゆう県民大賞、2013 年第 30 回 NHK 東北放送文化賞を受賞。ラジオ福島で「詩の礫～和合亮一のアクションポエジイ～」のパーソナリティを務めるなど、多彩な活動 を展開。震災以降、地震・津波・原子力発電所事故に遭った福島から、ツイッターで「詩の礫」と題した連作を発表し続ける。詩集に、『詩ノ黙礼』『詩の礫』『詩の邂逅』『私とあなたここに生まれて』『ふたたびの春に』『廃炉詩篇』『木にたずねよ』等。2015 年 8 月、ともにふくしまからこえをあげる 「未来の祀りふくしま」発起人として福島市稲荷神社にてシンポジウム・コンサート・未来神楽(創作新神楽)を開催。震災から 5 年を迎える 3 月刊行の最新詩集『昨日ヨリモ優シクナリタイ』(徳間書店刊)。

・和合亮一 (@wago2828) | Twitter　　・未来の祀り ふくしま HP　http://www.mirainomatsuri-fukushima.jp/

■丹治嘉彦（たんじよしひこ）　本芸術祭アート・ディレクター、新潟大学教育学部芸術環境講座教授

1960年福島市生まれ。新潟市在住。東京藝術大学大学院美術研究科修了。2011年より現職。1985年より東京の画廊で作品を発表した後、2003年からは「大地の芸術祭」、2009年「水と土の芸術祭」、2010年「瀬戸内国際芸術祭」にも出展。2001年より隔年で新潟市内野地区を舞台にアートプロジェクト「うちのDEアート」をプロデュースしている。2012年、2015年「水と土の芸術祭」アート・ディレクター。